竹内正一の作品に見る「満洲」時代のハルビン

―その表象と実像をめぐって―

（要旨）

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D185564

氏名：周秋利

本論文は「在満」日本人作家である竹内正一が描いたハルビンの表象に基づき、歴史的な視点から、「満洲」時代のハルビンの実像を検討した。具体的には作品で描かれている人間像、アイデンティティ、民族関係の問題をとりあげ、偽満洲国という独特の植民地形態、及び中日露の勢力争いの影響を受けたハルビンにおける言説のありようを再現したいと考える。

研究対象となるのは、竹内の作品のうち、ハルビンにおける中国人、日本人、ロシア人を扱ったものである。それらの作品は、偽満洲国時代のハルビンの表象を考察するのに適している。また、本研究はそれらの作品登場する言い回しや表現などに注目し、作者が意識して、或いは意識していなかった思想を究明するという研究方法を用いた。同時に作品の文脈を理解しながら、「満洲」時代における政治・社会・文化などの非文学的な言説の世界を考察した。

第 1 章では、短編小説「世界地図を借りる男」「友情」「寒暖」を中心に、竹内が描いた近代的消費社会とするハルビンにおける底辺の日本人像を考察した。まず、1920 年代までに、植民都市としてのハルビンという都市空間が形成され、近代的な消費社会への変化が促されたことを説明した。そして、「寒暖」を中心として、近代的消費社会の芽生えた 1930 年代のハルビンにおける日本人の特徴を分析し、欲望の消費の場としてのハルビンの夜の表象を考察した。また、竹内が描いた「特権意識」を持っている「寒暖」と「世界地図を借りる男」の日本人の主人公を通して、退廃的な風潮の成因を論じた。その上、「寒暖」をめぐって、消費行動の面から、竹内が退廃的な日本人青年の本質をつかんだ。最後に、「友情」を例として、竹内が下層社会の日本人青年のみに焦点を当てて描くことの理由を推察した。近代的な消費都市としてのハルビンという背景において、竹内は日本人のイメージを強調するこれらの作品において、日本人の若者の人物像を退廃的イメージで統一して形成し、当時の時弊を風刺する気持ちを伝えたことは、しきたりに従わなかった竹内の本性に合っていると思われる。

第 2 章では、短編小説「白眠堂徑徂」「馬家溝」「孤児」を中心に、竹内が描いたハルビンにおける底辺の中国人像を考察した。偽満洲国時代において、中国東北地方のジェンダー規範については、一層封建社会における礼節や道徳が喧伝されたことによって、貞節観念を取り戻したことがわかった。これに基づき、「白眠堂徑徂」と「馬家溝」の女性主人公をめぐって、竹内が形作った中国人像の多様性を検討した。そして、「孤児」を通して、＜オリエンタリズム＞という視点から、竹内が＜他者＞という立場で中国人像を描き出したことを論じた。この三つの作品における中国人像は全体的に見て、「逞しさ」という性質がステレオタイプ化されたものであった。その理由は、「在満」日本人作家が偽満洲国に対して、＜日本のオリエンタリズム＞という観念を持っていたからであると考えられる。しかし、具体的に味わうと、竹内は中国人像を

形作る時、細かい点を通して、多面的な人物像を浮き彫りにし、更には人間性の温かさを映し出す。最後に、竹内が「白眠堂徑徂」における中国人と日本人との会話文を通して「民族協和」に対して批判して、その実現の難しさを読者に伝えていたことについて検討した。三つの作品とも不幸な中国人家族の生活を描いたことである。作品の内容から、竹内の戦争に対する無言の批判も見出し得ると考えたい。

第 3 章では、「夏の日の戀」、「復活祭」での白系ロシア人の宗教的表象から、偽満洲国時代の歴史的実情と結び合わせて、ハルビンにおける白系ロシア人について論じた。まず 1858 年—1945 年の期間におけるロシア人の「満洲」進出の経緯を簡単に説明した。そして、偽満洲国のハルビンにおける白系ロシア人定住の要因と人口を簡単に紹介した。両編の作品はロシア正教の民族儀式・復活祭を物語のタイムラインとして展開した。「夏の日の戀」という作品は登場する人物との間に起こった物語を三つの起伏、「偶然の出会い」「蜜月期」「幻想からの目覚め」に分け、白系ロシア人と日本人の関係を暗黙のうちに示した。「復活祭」では、様々な苦しい境遇のもとで生きている人物を集めて物語の筋を設定する手法により、戦時における一般庶民の無力と苦難を表した。一方、流離う白系ロシア人にとって、毎年の復活祭を祝うことには明日への希望のみならず、故国への郷愁も含まれていたと考えられる。それ故に、偽満洲国において白系ロシア人は自身が偽満洲国の外国人としての帰属意識を持ったことが明らかになった。

第 4 章では、長編小説『哈爾賓入城』について論じた。『哈爾賓入城』で描かれた生活シーンを見ると、当時政府が唱えた「五族協和」というスローガンに反し、実際には多民族間の協和を実現することは難しかったと考えられる。一方、竹内の潜在的な意識の中で各民族の地位が平等ではなかったからこそ、彼はそのような一般の人間に対する同情心を作品に表していた。即ち、竹内は既に自分の民族—日本が偽満洲国の統治的地位に立ったという考えを持ち、作品を創作した。したがって、この時期の竹内が「五族協和」といったイデオロギーに同化したことは間違いない。「真実性と普遍性を持っている」と評価される竹内正一の作品ではあるが、その「真実性」は、ただ人々の生活シーンで実像が描かれていたことのみに当てはまるに過ぎないと考える。また、国策文学へ転向した後の表現について、『哈爾賓入城』においては「在満」日本人としての民族意識と使命を目覚めさせるという意図を持っていたと考えられる。作品には戦争に対する批判的な意識はなく、竹内正一が時局に迎合するために、そのような表現方法あるいは創作技法が小説の中に入っていたと考える。このような考えは、作品集『向日葵』のあとがきにおいて、竹内正一は「時局」下に自分の文学創作スタイルを忠実にすることができないという苦しみを示したことにも表れている。つまり、当時日本の文芸政策によって、ある文学者は自分の意志に反する作品を

創作したことが証明されるのである。

第 5 章では、短編小説「故郷」「向日葵」「山裾の街」と長編小説『哈爾賓入城』を中心に、都市と農村という二つ空間における「在満」日本人一世と二世の＜故郷意識＞について考察した。国策文学として創作された「向日葵」と「山裾の街」のいずれにおいても、「在満」日本人一世の「北満」に対する郷土愛を育もうという姿勢が読み取れた。作中でこれらの農村における日本人の＜故郷意識＞は、外的世界では日本国に属していたが、内的世界では「満洲」における自身の存在を意義あるものとして認めるというものであった。つまり、「満洲農業開拓民」は「満洲」を故郷として理解していたと考える。しかし、『哈爾賓入城』において、同じく「在満」日本人一世としての都市における日本人は日本が彼らの故郷という＜故郷意識＞は明確である。一方、「故郷」と『哈爾賓入城』は都市で暮らしていた「在満」日本人二世を主人公として描かれた作品である。二重のアイデンティティを持った彼らには故郷認識、さらには自己認識の危機が迫っていた。ただし、作中の主人公は共に「満洲」の土地に対して深い愛情を注いでいたことを反映している。その心境にも、同様に在満日本人二世としての作者の竹内の影が窺えるように感じられる。

第 6 章では、短編小説「風俗國課街」を中心に、多様なハルビンの表象と「在満」日本人について考察した。まず、ハルビンにおけるロシア式な国課街の表象を浮き彫りにすることによって、ロシア人が「満洲」移住に伴い、彼らの文化をハルビンに移植することに成功したことを示した。そして、主人公の日本人には馬家溝で「異国感」という感覚が生じたことから、ハルビンにおける異国或いは異民族の人間をもたらした文化が分裂状態になっていたと明らかにした。次に、主人公の偽満洲国への移住体験を分析した。偽満洲国へ移住した日本人は当時の政治宣伝を受けて、民族的・国家的アイデンティティクライシスに陥ったと思われる。最後に、戦乱の状況に置かれていた普通の人間にとって、支配民族の人間であれ、非支配民族の人間であれ、生命、自由への権利は自ら握ることができなかった点について、このような仕方がなく、不満な気持ちを竹内は作品によって示した。そこには竹内の戦争への批判と反省を読み取ることができた。

このように、竹内の作品群から、偽満洲国時代におけるハルビンの言説的な様相を明らかにした。また、彼の「満洲文学」に関する創作の特徴を五つにまとめた。第一に、竹内は「満洲」の都市表象を描いた上で、自然風景への熱愛や異民族の人間の特徴などにも触れている。第二に、植民地に対する批判を伝え、被支配者への同情の気持ちを示している。つまり、竹内は＜日本のオリエタリズム＞、即ち支配者の優位の立場を取って中国人と白系ロシア人を観察した。しかし、同時に人道主義的な心遣いをして、被支配者へ同情の意を表した。第三に、竹内は偽満洲国の文芸政策が厳しく

なった時、民族関係に及ぶプロットは一貫してリアリズムの創作理念を従い、「五族協和」の実現の難しさを表している。第四に、竹内は「傍観者」の視点から、多くの作品を創作した。しかし、竹内は自分自身の社会への批判と戦争への反省を物語の筋から暗黙に表した。第五に、白系ロシア人を描く竹内の広い視野のもとで、彼が描いたハルビンの表象と実像を全体的に考察することができると明らかになった。